

組織目標評価報告書（平成29年度）

部局名：

理学部

部局長名：

吉野雄二

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	
①-1 目標	①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>○教育の実施体制について 教員のインセンティブ向上のために教員に対する表彰制度(教育貢献賞)を継続実施する。ピアレビューまたは副担任制度等を継続実施し、質の高い教育の維持に努める。 入学試験に関する広報活動を積極的に行い、優秀な学生の確保に努める。</p> <p>○教育方法・内容について 最先端研究を反映させた学部教育を検討し、教育の改善に努める。 また、電子書籍を活用した授業および双方向授業のあり方について検討し、実施する。 グローバル化に即応した教育方法の可能性について検討または試行する。 フロンティアサイエンティストコースを維持し、優秀な学生に対して早い時期から先端の研究に 触れる機会を与える。</p> <p>○教育の成果(学習の成果、卒業後の進路)について 学部教育の質保証のため、カリキュラムや授業内容の検討を引き続き行う。 とくに、学部共通科目の設定、卒業予定学生への学士力確認試験の実施の可能性について 検討を行う。</p> <p>○学生支援について 自律的学習を促すための自主学習室やアカデミックアドバイザーアシスタント(AAA)制度を継続し、 学習環境の充実を図る。 2年次終了時および卒業生の内の優秀者に対して学部長賞を授与する。 ○国際共同による教育の状況について SGUの計画推進のために理学部に割り当てられた外国人留学生の受け入れ目標数、および 日本人学生の海外への派遣目標数を実現するための制度について検討を行い実施する。</p>	<p>1. 理学部独自のコースであるフロンティアサイエンティスト特別コースの指導などを通じて学部 教育への功績、および国際貢献などを通じて岡山大学理学部の広報に功績があった教員2名に 教育貢献賞を贈った。またピアレビュー(学科によっては代替として副担任制)を今年も実施し、 質の高い教育の維持に努めた。</p> <p>2. 引き続きフロンティアサイエンティスト特別コースの学生を選抜し、学年の早い時期から最先 端の研究に触れる機会を多く与えた。</p> <p>3. 理学部の志願倍率を回復させるために以下のような対応を行った。 (1)岡山県下の県立大学10校以上に広報担当副学部長を派遣し進路指導教員や高校生への 理学部広報を行った。 (2)ホームページの充実を図るために、教員による講義内容を高校生向けにアレンジした動画 の配信を始めた。 (3)各学科1名の教員が「夢ナビ」に画像を上げるための登録を行った。 (4)オープンキャンパスにおいて入試説明会・保護者説明会を行った。 (5)ホームカミングデイにおいて講演会及び懇談会を実施した。 (6)保護者向けのホームページサイトを作成した。(7)SSH高校の課題発表会などの審査・講評 を理学部教員が担当し、同時に岡山大学理学部の広報を行った。 4. 本年度もSelf Learning SquareとAcademic Adviser Roomを運営し、学生の自主学習を促すと ともに学習環境の充実を図った。 5. オリエンテーションの機会等に、教科書、参考書を電子教材として学生に提供するために導 入した電子書籍の利用を促した。 6. 優秀な卒業生5名に理学部長賞を授与した。 7. 国際共同による教育の状況としては、理学部独自の取り組みとして、国立台湾大学との化学 科国際ワークショップ(今年度は広島大学で開催)、フロンティアサイエンティストコース生を対象 にハワイ諸島で学ぶ地球生物学などの取り組みを行った。</p>
①-2 全学の組織目標との関連	①-2 大学全体への貢献
<p>教育の質の向上に資する方針に重点を置いた。 グローバル化に対応する留学生受け入れや学生派遣に対しては、学部内の体制の充実を行 い全学が主導する方針や計画に協力する。</p>	<p>国際共同による教育を含め、派遣及び受け入れ学生数の目標値をほぼ達成している。(留学生 受入数8、派遣学生数24)</p>
①-3 目標とする(重要視する)客観的指標	①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>前期日程試験の志願倍率を2.0倍以上に引き上げる。(H28年度は1.7倍)</p>	<p>志願倍率回復を狙った上記の取り組みの結果として今年度の前期日程試験の倍率として2.2倍 を確保できた。分析結果を待つ必要があるが来年度もこれ以上の倍率を維持するために広報に 努める必要がある。</p>
②研究領域	
②-1 目標	②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>○研究水準及び研究成果等について すでに高評価を得ている研究を継続的に発展させるために支援をする。 また発展が期待される基礎研究および新分野の創成を目指す研究を推進・支援する。 さらに研究成果の公表をウェブ等を通じて継続して行う。</p> <p>○研究実施体制等の整備について 現在行われている優れた研究を継続的に発展させるために理学部研究推進経費の配分を行 う。 科研費申請状況を把握し、未申請者に対して申請の依頼・支援を行う。</p> <p>○国際共同による研究の状況について 国際共同研究を促進するために、教員の海外派遣を推奨する。 ○女性・外国人研究者の受入状況について 女性教員および外国人教員の採用を促進する。</p>	<p>1. 現在行われている優れた研究を継続的に発展させるために理学部研究推進経費の配分を 行った。科研費申請で審査結果が不採択であったもので、その結果がA評価であった者4人を 対象に研究費(計100万円)の支給を行った。また、科研費を代表者として申請した者を対象 に、物品等購入のための補助金として2人に合わせて155万円を支給した。</p> <p>2. 研究成果は継続的にウェブ等を通じて公表している。 http://www.science.okayama-u.ac.jp/research/index.html</p> <p>3. 沈建仁教授のみどりの学術賞、橋本光靖教授の日本数学会代数学賞をはじめ、のべ10人の 教員・学生がその研究業績によって学内外の賞を授与された。</p> <p>4. 今年度は、女性非常勤研究員9名、外国人非常勤研究員13名を採用した。(うち異分野基礎 研の所属は6名、10名)</p>
②-2 全学の組織目標との関連	②-2 大学全体への貢献
<p>研究大学としての岡山大学の発展を促すための研究支援に重点を置いた。 さらに研究に専念できる環境を維持し、その上で本学および理学部の特色である異分野融合 を推進し、理学部の強みである研究力の向上を図り「実りの学部」の形成に協力していき たい。</p>	<p>本年度開催のスーパーグローバルホームカミングデーでは「わくわく理学—未来に挑む岡大 理学部」を開催し、理学部の研究の成果の公開、並びに岡山大学の広報に寄与した。</p>
②-3 目標とする(重要視する)客観的指標	②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>科研費申請が可能な教員全員が申請を行うことを目指す。</p>	<p>科研費申請者は39人(全体に対する申請者率は59%)であり、申請可能な教員のほぼ全員が 申請をした。</p>
③社会貢献(診療を含む)領域	
③-1 目標	③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>○地域社会との連携、社会貢献について 公開講座・出前授業・研究室公開などを積極的に行い、地域貢献と科学普及に貢献する。 岡山県教育委員会理科部会、同数学会などの行事に積極的に関与し、理学分野において 県下の高校との連携を更に深める。 スーパーサイエンスハイスクール(SSH)における研究指導や運営に積極的に参画し、高校生 の理科と数学への関心を高めることに協力する。</p> <p>○国際交流・協力について 国際交流(国際ワークショップ、エラスムスムドス)や協定締結を前提とした招聘などに對 する支援を実施する。</p>	<p>1. H29年度については公開講座・出前授業等への講師派遣は10件、高専訪問は6件、理学部 への高校生受け入れは14件であった。</p> <p>2. 化学科は広島大学と共同で国際ワークショップを開催し、国立台湾大学及びテュルロンコン 大学の学部学生とともに学ぶ授業を開催した。 この事業を含めてH27年度は、留学生受入数8、派遣学生数24であった。</p>
③-2 全学の組織目標との関連	③-2 大学全体への貢献
<p>岡山地域を中心に科学普及による地域貢献と国際交流に主眼を置いた。</p>	<p>岡山県教育委員会理科部会等と協力し、県下のSSH校や高校理科科が行う課題研究発表会な どの開催に協力し、岡山大学全体の広報に努めた。</p>
③-3 目標とする(重要視する)客観的指標	③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>高大連携事業や地域の科学普及活動などを年にのべ30件以上実施する。</p>	<p>今年度は講師派遣・高専訪問および高校生受け入れをあわせて30件を実施し、目標を達成し ている。今後も優秀な学生の確保及び地域の科学普及のために積極的に活動を続けていき たい。</p>

④管理運営領域	
④-1 目標	④-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>○部局運営体制の改善強化について 学部内の業務においては、構成員の負担が公平になるような業務内容の見直しを行い、教員の研究時間の保持に努める。</p> <p>○部局組織の活性化について 急激な学内外の変化にすばやく対応することができるような管理運営の方法を検討していく。既存の学部内事業のいくつかについては、その効果を検証し、廃止できるものは廃止する。</p> <p>教職員の意見が十分に反映される運営体制を維持し、構成員の意見を丁寧に聴取し、学部運営に反映させる。</p> <p>○ダイバーシティの推進 女性教員や外国人数員の採用を推奨する。</p> <p>○全学における数学系の教員の統合 部局を超えた数学系教員のネットワーク形成を理学部が中心となって行う。 学部を超えて数理的問題の解決に対処する基盤を構築し、将来的には国内外のネットワークに拡充を図る。</p>	<p>1. 人事凍結が宣言されて1年が経ち、部局運営において現在最も大きな問題は教員の配置に関するものである。また教員の絶対数が少なくなる状況では一人当たりの教育や運営上の負担が増えつつある。前者については話し合いを増やし、後者に対しては雑務となる会議を減らす方向で考えている。この状況をしなやかに乗り越えていくには学部長としての力量が問われるところであるが、実際に会議の量を減らすことはできていない実情がある。</p> <p>2. ダイバーシティの推進に関して、今年度採用した女性教員は承継准教授1名・特任助教1名であった。また今年度採用の外国人数員は特任教員3名(うち2名は異分野基礎研)であった。</p> <p>3. 全学における数学系の教員が統合するためのセンターの設置について、「理学部附属」から「全学」へ舵を切り替えたところであり、関係する学部と協議を続けているところである。</p>
④-2 全学の組織目標との関連	④-2 大学全体への貢献
<p>数学系の教員の統合については、数学という学術分野に限って見た場合、岡山大学ではかなり非効率な方法で研究・教育が行われているので、それを部局を超えた形で是正・改善していくことを目的とする。大学機能の効率化に合致するものである。</p>	<p>教員配置の効率化の観点から、分野ごとの教育・研究グループがまとまることは今後の大学のあり方においては必要と思われるし、多くの大学でそのような考え方が実現されている。岡山大学でこのやり方の先駆けとして数学が名乗りをあげているところである。</p>
④-3 目標とする(重要視する)客観的指標	④-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>女性教員及び外国人数員の採用を行う。(ともに一人以上。)</p>	<p>今年度は、承継の女性准教授を1名採用したほか、女性の特任助教・非常勤研究員を多数採用した。また外国人についても、特任助教ほか非常勤研究員を多数採用した。</p>
【総括記述欄】	
<p>研究の推進、志願倍率の増加、グローバル化やダイバーシティへの対応、学部教育の充実など概ね計画通りに達成されたと考えている。</p>	